

Uターンして洋菓子と珈琲の店を開業

観一・25回 齊藤 洋三

(昭和49年卒)

はじめに

そもそも、私は観一志望ではなかった。小学校から中学校の頃は、建築士かパイロットになることが目標であった。したがって、高校は工業高校あるいは、航空専門の高校への進学が希望であった。なぜ、観音寺第一高校に進学したかというと、私の長兄から「大学進学してから、その後に将来の職業を選択してはどうか」とのアドバイスがあったからで、積極的に観一志望ではなかった。

高校2〜3年の時は男子クラス、3年7組で、昭和49年に卒業した。在学中は目立った存在ではなく、ほとんど授業時間のみで3年間過ごしてきた。大学は、中学時代からの目標の一つでもあった工学部を志望し、建築で

はなく土木工学科に進学した。

土木の道を志したのは、もちろん地元三豊出身の大久保謙之丞氏の影響もあり、もともと工作好きでもあったことから瀬戸大橋の事業に携わりたいとの思いを持つようになり、土木工学の道を志し鳥取大学に進学した。大学では構造工学を専攻し、吊り橋に関する研究をすることができた。観音寺からはるか遠く、日本海側は当時は交通の便も悪く、陸の孤島といっても過言ではなく、しかも冬には1メートル級の豪雪になる地域であった。温暖で温和な瀬戸内地域の気候風土とは異なり、地理的にも気候的にも大変厳しい地域であるが、雪国特有の人情がある地域でもある。

その頃、初めて珈琲店と出会うことになる。当時は特に意識することもなく、土木工学一筋で大学時代を過ごした。卒業後は東京の建設コンサルタントに就職し、橋梁の設計はもとより道路計画に関する業務全般にも従事した。もちろん在職中には、瀬戸大橋と明石海峡大橋の



明石海峡大橋

事業に参画することができた。

その当時、仕事の合間に見つけた喫茶店でコーヒーと再会するものの、これまでの人生の流れの中では洋菓子店・喫茶店を経営することとは全く結びつかなかったし、自分でも想像していなかった。むしろ設計事務所としての独立を考えていた。しかしながら、今にして思えば、東京では珈琲館やルノアール、大阪では蘭館珈琲ハウス、京都では前田珈琲やイノダコーヒー等々、珈琲との出会いが随所に存在していた。また、根っからの甘党であったことも考え合わせると、現在の状況に納得がいく。人との付き合いは苦手であるが、人と付き合うことは好きである。

そして、株式会社社長大に約30年間勤務し、定年退職を

迎えた。やはり、瀬戸大橋と明石海峡大橋という《百年の計》に参画できたことは感慨深いものである。それとともに、少年期からの夢を実現できた満足感というのものはひとしお一入である。

黄金の15年を目指して

「本職」はと言うと、建設事業を中心とした社会インフラ全般に関するコンサルタントである。公共事業の構想段階から、企画・計画・調査・設計を行った後、様々な利害関係者間の調整を経て、工事実施・完成に至るまでのすべての過程に携わってきた。国・地方公共団体などが行う行政に関わる判断・決定に際して、必要になる多岐にわたる関連資料を作成する。それに必要な様々な調査・検討を行うのが専らの仕事である。大変恵まれたポジションにあつて、業界の中でも特異な立場での役割にあつたことから、所属した企業からは雇用延長を要望された。52歳であつた。

その後の約5年間で新たな挑戦を試みた。これまでの経験を生かして、総合的なコンサルタントを目指して、次に向けて始めようとした。「時すでに遅し」の感があつた。新たな取り組みを始めるには、残りの時間が足りなさすぎる。年齢的にも体力が不足している……、パワー不足である。退職後をどのように生きるか？

「黄金の15年」をまさに黄金の期間とするために、60歳での定年退職を決意する。残りの3年間は退職後の準備を意識しながらである。会社側との闘いでもあつた。東京への転勤く本社勤務という誘惑など、様々な慰留策を持ちかけられる。しかしながら、すでに起業のため準備を進めつつ日々の活動をしていたことから、心が揺らぐことはなかった。というのも、兵庫県西宮市に居を構え、また大阪市に仕事の拠点があつたことの利点を十分に活かしつつ、ヒト・モノ・金とともに、様々な情報や知識をも享受できた。新たな人脈も形成できた。建設分野一筋の人生にあつて、絶対と言つていいほど出会うは

ずのない分野の方々とも知り合うことができた。さらに、その人脈がさらなる拡がりを実現して、香川県内の企業とも繋がることのできた。事業を進めるために「地元と繋がること」、このことが最も不安なところであり、最も重要な課題でもあつた。

三豊市ふるさと会、同窓会京阪神支部との出会い

57歳の時、三豊市から、ふるさと会関西支部への誘いの連絡があつた。このことも、その後を決断するに十分すぎるほど大きな要因となつた。定年退職後について様々に模索を行つていた頃でもあり、何か見つかるとは思い出席した。そこでの出会いが大きな後押しになつたことは言うまでもない。観一高同窓会京阪神支部の諸先輩方や、三豊市役所の方々との出会いである。わずかな時間であつたが深い交流を持つことができ、今日に至るまで様々なご支援をいただいている。その出会いのおかげで、今私たちが家族がまっすぐ立ち、前向きに目標



妻と娘夫婦と一緒に

に向かって邁進できていられるのだと思っている。その一方で、阪神地域を中心にパティシエとして活躍してきた長女が、勤務先を退職すると言い出した。私には突然のことであった。後で知ったことであるが、それ以前にフランス人の彼氏と出会っており、かなり具体的に今後の計画をまとめていたようである。後に私たちの息子になる。

最初の出会いは宝塚の清荒神である。娘から一緒の初詣に行こうと誘われ、恐る恐る出向いた次第であるが、

彼からの最初の言葉は

「まいど、バリバリの関西弁であった。幼少期に日本のアニメの影響を受けて、日本通になったようである。日本人よりも日本人らしく、日本の伝統やしき

たりをも十分理解しているさまを見ると、覚悟ができていると感じ、娘を託すことにした。そして、長女との結婚を機に、私たちとともに故郷へと移住することとなる。現在は、子供が生まれて3人家族になって、七宝山の裾野の豊中町桑山でシャインマスカットを栽培している。

最初は《出会い》という一瞬である。それが《繋がり》へと発展し、《関係》を形成し、《信頼》へと発展する。

そのことがさらに、《決断》そして《実行》へと、私たちを導いたのだと確信できる。そのようなうねりがあって、それに乗っかって今に至っているということも、今だから言えることであるが、特段意識して行動したわけでもない。家族4人がこの様になっていたと、強く思い続けただけである。これは家内の持論である……、「願えば叶う」。

「三豊市ふるさと会」という出会いが、私たち家族の人生を方向付けた大きな転換点となった。生まれて18年間故郷に育まれ、高校卒業後、大学へ社会人へと約40



母の誕生日に作った
ケーキ

母からの教えである。

夢の実現

そして、グルマンディーズの開業に向けひた走る。コンセプトを整理し、不動産・工務店・金融機関、関係行政機関等々との打合わせ、協議・調整、そして届出などを行う。それにおおよそ1年の期間を費やした。あつという間であった。その後も様々な人との出会いがあった。

故郷である豊中町での開業にこだわった。国道11号線から少し南に入った場所で、適地を得られることになった。工務店との出会いにも恵まれて、その後、順調に完成へと向かうことができた。設備も地元企業からの支援

年、故郷を顧みることなく、今62歳である。ようやく、故郷への恩返しをする機会を得られた思いである。故郷に恩返しをすること、それが私の



仲南の森での切り出し



店を支える大黒柱



店の外観（国道11号線から）

を受けることができた。店を支える大黒柱は、仲南の森から切り出された香川県産の檜である。

そして、棟が上がる。息子の故郷フランスからも贈り物が届く。



上棟式

アートに生まれ変わったフランス・アルザス地方の屋根瓦



店舗玄関先にある手作りの看板(ジェロムの父からのプレゼント)



おわりに

多くの方々からの応援・支援をいただきながら、今に至っていることに感謝している。

・多くの同窓生をはじめとして、地元地域の方々からの暖かい支援

・娘夫婦に対する市役所からの手厚い支援と指導

・さらに、観一高同窓会京阪神支部からも応援

地元の方々から喜ばれる場所、三豊・観音寺から都会に移り住んでいる人々と故郷を繋ぐ場所、多くの人々が行きかい交わって出会いがある場所、このことが私たちグルマンデーズの願いである。そして、何よりも「うんどんだけじゃない」ことの一つでありたい。

地元には都会の文化を感じてもらおうための空間を提供、「神戸の洋菓子」と「大阪の珈琲」でもてなし、都会からの移住・帰省者の方々には癒しの「場」として、待ち合せや、親交と交流、打ち合せ・会議、出会いなど、様々な場面で活用されることを期待する。そして、地元



の観一高同窓生をはじめ、高校卒業後、地元を離れて京阪神地域などに移り住まれた観一高同窓生の方々が、帰省された折に待ち合せのできる場所であったり、お菓子と珈琲などで休憩し寛いでいただける場所として、活用されることを願っている。

洋菓子と自家焙煎珈琲の店「グルマンデイズ」

齊藤洋三（観一25回）・弘子（観一30回）

〒七六九一五〇二三 豊市豊中町笠田笠岡一六三二一五

電話…〇八七五二四八五一八